



おじさんズ通信

2021年11月号 (No.12)

発行元：登別市新生町4丁目桃柿通

緑風舎

発行者：おじさんズ3号

今月号は特別増量4頁！

「豊かな人生」とは、なんぞや

NHKのテレビ番組「ドキュメント72時間」を見ていて、インタビューを受ける男性のひとことに思わず唖ってしまいました。そして、自分に問いただしてみた。「豊かな人生」って、何？

ファミレス、空港、居酒屋など毎回、ひとつの現場にカメラを据え、そこで起きる様々な人間模様を72時間にわたって定点観測するこのドキュメンタリー番組。偶然出会った人たちの話に耳を傾け、“今”という時代を切り取るのが狙いとく。

で、TV画面に話を戻すと、撮影したのは今年の夏、場所は東京・葛西駅の地下にある1万台収容可能な駐輪場。カメラを向けられた男性は、腰が悪くて都内の治療院で施術してもらい、自宅に帰る途中という。おそらく六十代前半くらいか。現役時代のことをたずねると、商社マンだったか、エンジニアだったか聞き洩らしたが、結構、世界各地を飛び回っていた。そこで、これまでの人生についてマイクを向けると、意外にも返ってきた言葉は

「豊かな人生じゃあ、なかったね」

ウムッ、ム、ムッ？ 豊かな人生じゃない？ 追い討ちをかけたのは、続いているひとことだった。

「日本人は可哀そうだね」

世界を股にかけ、さっそうと外国人相手に仕事をしてきた元エリート会社員は、海の向こうに住む人々の世界に身を置いて、何を悟り、日本人社会に対して何に憂うのか。エコノミック・アニマル、モーレツ社員、ブラック企業、派遣切り、etc…「豊かな暮らし」でも「豊かな知識」や「豊かな財産」でもない。

顧みるとこの73年間、私は「豊かな人生」を送ったのだろうか。それとも収支決算すると「貧しい人生」で終わろうとしているのか。煩悶しているうちに、「これかな？」と、同い年で16年前に亡くなったフォーク歌手、高田渡の「私の青空」を口ずさんでいた。



来館記念葉

来年春には、札幌に移転する予定の「登別映像機材博物館」。登別駅前通りにオープンしたのは平成27年(2015)秋だから、ミュージアムとしての歴史は足掛け7年になる。

館長のBIN山本は工業高校時代、一緒に新聞局などで活動した仲だ。卒業後は実家のある登別を離れ、札幌を拠点にムービーカメラマンとして活躍してきた。一方で仕事のかたわら、捨てられる運命にあった用済みの撮影機材をコツコツ集め、故郷で念願の博物館を開くに至った。

「入館料は絶対とらない」と意

地を通してきた男だけに、商売根性はゼロに等しい。

そこで、ささやかながらも運営の一助に一と、2年前に思いついたのが、ゴミ箱行き予定だった端切れの映画フィルムの活用だった。漁ってみると、あるで

はないか、吉永小百合主演映画の予告編や、伊達時代村で使われた戦国時代の合戦映画フィルムが。

早速、長方形の紙の真ん中をくり抜き、切り取ったフィルムのひとコマを3枚、ペタペタ貼り付け、ラミネート加工したところ、それなりの来館記念の葉

(しおり)が出来上がった。途中からは、1963年(昭和38年)の室蘭スカラ座入場チケットの写真も、ひとコマに加え、さらにオリジナル感も演出した。

Donation 代わり

ドネーション(Donation)を翻訳すると「寄付」と出る。小樽文学館や室蘭・港の文学館でおなじみのコーヒーを一杯所望して、箱の中に

任意の金額の硬貨をチャリン、あるいはお札を入れる行為だ。

葉はそのDonation代わりだが、意外と好評で、(次ページへ続く)



この2年ほどで、来館者の手に渡ったのは100枚、いや200枚だったか？ 小百合ちゃん人気は、いまも健在なり。

ちなみにチャリン箱はおかず、1枚の金額は53年前の室蘭の映画館入場料金にした。まだ、見たことのない方は、いくらだったか、ご想像を。掲載した写真をよく見れば、分かるかも、

後から知ったのだが、東京・三鷹にあるジブリ美術館でも、入場券にアニメ・フィルムを使っているようで、似たような発想はあちらこちらに転がっているものだ。

その葉も、道都移転でお役目御免となった。札幌に移って、新たな応援の志士は、どんな Donation を考え付くか、バトンは渡したぞ、と言っておこう。

本を巡る点景

その壱

本の語源

自宅から歩いて5分ほどのK公園の奥に、大きなミズナラの木がある。おそらく、自生したものを、そのまま公園木として残したのだろう。ミズナラはブナ科コナラ属の落葉広葉樹で、ブナと並んで落葉広葉樹林の主要な樹種のひとつとある。

一方のブナは森の女王とも呼ばれるとか。世界自然遺産に登録された白神山地や黒松内のブナ林が有名だ。

そのブナに関して、図書館の除籍本を読んでいて目にとまった一節がある。

ヨーロッパでは、むかし羊皮紙が高価だったので、ブナの木を薄い板に文字を書いたという。つまり木簡。英語のbookもドイツ語のBuchも、もとはドイツ語のブナ=Bushからきているものだそうで、「これらの単語は、ヨーロッパ文化がブナの森林から生まれたことを端的に示している」（市川健夫『ブナ帯と日本人』）。

そうか、「ブック」の語源はここにあったのか、と知らないことの多さに、あらためて恥じ入った。それが記された大森久雄著「本のある山旅」（山と溪谷社、1996年発行）と、キャンプ用の折り畳み椅子、コーヒーカップ、ステンレスボトル持参でK公園に出掛け、緑陰読書ならぬ小春読書にひたった。来年の春



にもう一度、本を手にも公園へ行こう。

その貳

手作り本

「それまでスチール製書架の最上段に並ぶ資料本の背表紙を、漫然と端から順に目で追っていた。すると、薄手のためか背に題名はないものの、整列を拒むように背中を突き出したA5判の小冊子が目に留まった。指で押し込もうとすると、もともと幅広の変型本なのだろう。少しも動ぜずといった手ごたえとともに、

（読んでくれ）

と、催促しているようでつい手が伸びてしまった」

上記の一文は来年秋発行の地元文芸誌に投稿する予定の創作の書き出し部分。まだ、ほんの一部しか書けておらず、山道はまだ一目目といったところ。

で、この項の本題はというと、A4サイズの紙を山折りにして綴じた30ページ足らずの手作り本は、本当に目につくのか、という疑問。「土台骨や添え物にリアリティがあってこそ、フィクションは真実味を帯びてくる」という訳で、それならば試してみるべし、と模擬本を作り、実際にスチール製書架置いてみた。



結果は、目論見通り=写真上=。絵空事でないことに安堵し、筆に少し勢いがつきました。

その参

自分史本

登別市立図書館のホームページに、許可をいただき「市民活動サポーターおすすめ郷土資料」コーナーを設けさせていただいている。

もう1年たつが、新作がないと飽きられる。そこで、明治の初め、この地に開拓に入った仙台藩倉家の元家老、日野愛熹の孫娘・助川徳子が書き残した「寒菊」をテキストデータ化して、11月1日に追加掲載した。

発行は昭和60年だから、もう36年たつが、いろいろ新たな発見があり、役にも立つ。

そのひとつが、登別駅で駅弁の立ち売りを始めたのは愛熹の次男で徳子の父親、惇（まこと）だったらしいこと。一度は札幌で運送業をしていた彼は家族ともども故郷に戻り、登別駅前に居を構えた。そして「初めて店を出し駅売りをはじめたのでございます。～略～ 明治四十二年、私が十才の時でございます」（「寒菊」より）。

いつの日か、有名温泉観光地の鉄道の玄関口だっ

た登別駅での立ち売りの歴史を調べて、まとめたい
と思っていただけに、これは有用な情報である。

「自分史」。本にしなくとも、地元の文芸誌にで
も、書き残しておきたいものだ。のちの世の人々の
ために。

一筆礼状

登別駅前で八面六臂の活躍をするミスタ
ーN氏へ。お土産にいただいた北海道音威子
府村特産「黒いそば」、
おいしくいただきました。
歯触りがしっかりしてい
て、胃と目と舌の記憶領
域にツルツル入りました。
ごちそうさま！

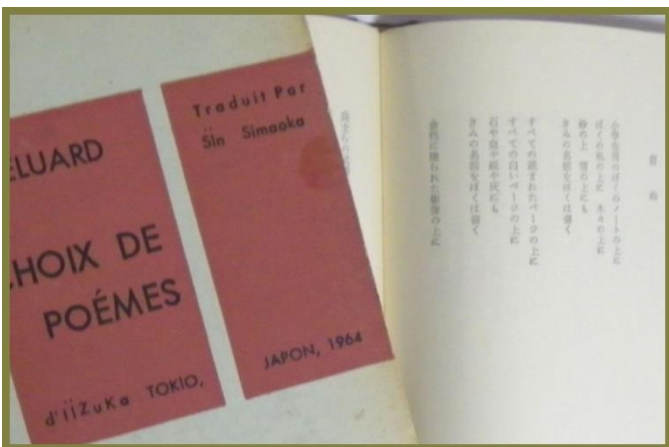


「自由」

今月号が増量になったわけは、至極単純。最後の4
ページ目に85行に及ぶポール・エリュアールの詩
「自由」（嶋岡農訳）を載せたいがためだった。そし
て、ただ書き連ねるだけでは芸がないと、ひと工夫凝
らしました。多分、見たら気づくはず。

エリュアール（1895-1952）はフランスの
詩人。「自由」はナチス・ドイツ占領下の1942年
に発表され、英国空軍機からフランス全土にばらまか
れ、絶望に陥っていた国民の心に希望をよみがえらせ
た（一部 Wikipedia 引用）。

妻が札幌で買い求め、プレゼントしてくれたこのエ
リュアール詩集。自宅で道新の若い記者と呑んでいて、
つい勢いというか弾みで贈呈してしまった。酔いが覚
めて、残ったのは後悔のみ。「それなら、あげなきゃ、
よかったのに」とのソシリに身が縮んだ。しかし時代
かな。5、6年前、ネット経由で再び同じ箱入り本を
手にすることができた。



そうした便利な時代になった半面、ミャンマーや香
港情勢、ネオナチの台頭などをニュースで見聞きする
たびに、国内の動きも含めて歴史の歯車は「右向け右」

の時代に逆回転しはじめているような気がするが、杞
憂だろうか。

「おじさんズ通信」、ついに検閲の対象に！

田舎の新聞に、こんな見出しの躍る時代があっては
ならない。

薫風 烈風

▶1ページ目の最後に（次ページへ続く）の、また
がり案内をしました。そこで思い出すのが、ローカル
記者時代に読んだ杉山隆男の「メディアの興亡」です。

アメリカなどにならって、日本の新聞産業もコンピ
ュータで紙面制作に入ろうとしていた時期、日経が先
駆けてIBMにシステム構築を発注した。そこで、ひと
悶着あったのが、1本の記事のページまたがり。

「ひとつの記事は必ず、同じ面に、収めなければなら
ない」と編集幹部が言え

「次のページに続いて、いいだろう。何でそれほ
ど、こだわるのか」とIBM技術者。

体裁主義か、合理主義か。まさに攻防、いや興亡の
ひと幕を、この本で知った。戦争に負けた一因もここ
にあったのかな？

▶手作りヨットを作り、津軽海峡横断に挑もうとし
ているご老体が、近隣のマチにいる。「断念したほう
がいい。おやめなさい」と、いつ切り出そうかと思案
の最中です。そして、代わりにヘミングウェイの向こ
うを張って、葉民具右衛著「老人と舟」を書き上げ、
海峡越えをあきらめてもらおうと画策している。

それにしても、ベニヤ板を材料に双胴型ヨットの2
本目の胴体製作までこぎ着けたとか。できれば11月
中に海で試乗を一と、少年のごとく目を輝かせる姿を
見ると、「何とか、成功させてあげたいんですがね」
との声も。ボケ老人ならぬ、冒険老人のでっかい夢、
出来るものなら実現させてあげたいが、その前にコト
が露見して、そのスジから「待った」のお達しがあり
そう。

▶「冬タイヤへの交換も終わりました。もう安心で
す」と先日、電話の向こうの沖縄の親戚に伝えると「冬
タイヤですか」と、ほとんど想像がわからない様子。で
きるものなら3月まででいい、沖縄といわず、静岡あ
たりで冬を越したいものだ。富士山を眺めながら。

▶11月中旬、私的ホームページ「おじさんズ」の
「ちまちま備忘録」を改め、「おじさんズ通信」のペ
ージにしました。バックナンバーもあり。メール送信
不要という方はご一報いただき、以後こちらからダウ
ンロードを。それにしても4ページはきつい。次号か
ら2ページに戻ります。では、皆さん、お元気で〜。

（4ページ目も、お見逃しなく）

小学生用のぼくのノートの上に ぼく の机の上に 木々の上に 砂の上 雪の
 上にも きみの名前をぼ くは書く すべての読ま
 れたページの上に すべ ての白いページの上に
 石や血や紙や灰にも き の名前をぼくは書く
 に 兵士らの武器の上 王たちの冠の上にも
 ジャングルの上 砂漠の さまざまの不思議の上
 の上 ぼくの少年期の きみの名前をぼくは書
 名前をぼくは書く 夜の くに 日々の白いパンの上
 に 婚約の季節の上にも く 青空のぼくのすべて
 のぼろ屑の上に 池のか びくさい太陽の上に 湖
 の生きている月の上にも きみの名前をぼくは書
 野原の上 地平線の上に 鳥たち翼の上に そし て影の風車の上にも き
 みの名前をぼくは書く 暁のひとつひとつの閃 きの上にも 海の上 船の
 上に 狂ってしまった山 の上にも きみの名前を
 ぼくは書く 雲の泡の上 に 嵐の汗の上に 重苦
 しくあじけない雨の上にも きみの名前をぼく は書く きらきら光る形
 の上に 色彩の鐘の上に 肉体の真理の上にも きみの名前をぼくは書く
 た小道の上に 掘られた道すじの上にも きみの名前をぼくは書
 く ともされるランプの上に 消されるラ ンプの上に 集ったぼくの家族の上
 も きみの名前をぼくは書く 鏡にもぼく の部屋にある 二つに割られた果物の
 上にも ぼくの寝台 からっぽの貝がらの 上にも きみの名前をぼくは書く 大
 食いでやさしいぼくの犬 の上に その立って
 いる耳の上に その不器 用な足の上にも き
 みの名前をぼくは書く ぼくの扉 掛けの上にも し
 みなれた物たちの上に 幸福な火 のゆらめ きの上にも きみの
 名前をぼくは書く 協調 する肉体 のすべて の上に ぼくの友人
 たちの戦線の上に さし のべるそれぞれの手
 の上にも きみの名前を ぼくは書く 思いが
 けない窓ガラスの上に 待ちうける唇の上
 沈黙のその上にまでも は書く かわされた
 ぼくの隠れ家の上に 崩 れたぼく の燈台の
 壁の上に きみの名前を ぼくは書 く 欲望
 あらわな孤独の上に 死 の行進の上にも き
 みの名前をぼくは書く 上に 思い出のない希望の 上にも きみの名前
 上に 消え去った危機の 上に 思い出のない希望の 上にも きみの名前
 をぼくは書く そして一つの言葉の力で ぼくはまたぼくの人生をはじめる きみを知る
 ため きみの名前を呼ぶために ぼくは生まれた
 自由よ。

「自由」=ポール・エリュアール（フランス 1859~1952）